

人は一般に、生活や職業のなかで「自分流の観察術」を実地に身につけているものであろう。色覚少数者も、いわゆる「ろう文化」（たとえば手話）に相当するような方法や技法をあみだしていたかもしれない。しかし、それまでもが「ボロを出さないための工夫」と一緒くたにされ、あるいは、あやふやな能力の主張と見なされ、根拠のない「虚勢」ではないかとの疑念にさらされてきたのではないだろうか。その結果、当事者においてもこれを分別しづらく、分別されていても個々人の経験則として分散されたままに放置され、文化として生成され洗練させられることなく、過ぎてきたのかもしれない。

実は、ホルムグレン自身が、鉄道員は信号の色ばかりではなく明るさやランタンの動きも見、規則的な運行と照らし合わせて状況判断をおこない、つまり補足的な情報をも活用して重大な過失を回避していると指摘していた（Jeffries 1879: 147-9）。重要なのは、それが彼にとっては、色盲の探知を阻んで危険を覆い隠すものにほかならなかったということである。つまり、同じ経験や観察事例でも、それを置く地平によって正反対の意味を持つことの例証でもあろう。

1990年代半ばには、当事者に「色間違いを起こしやすい状況を具体的に説明し、安易に色判断をしないように指導」という解決策が提起されてはいた（市川 1995: 88）。診断名と制限を告げるだけで終わっていたのに比すれば前進であったろう。しかし、今日的には、危険回避の禁止的な指導ばかりではなく、当事者とともに総合的・代替的な観察法を構想するという積極的な趣旨を加えるべきだろう。それには当事者の経験に学び、科学的に裏付け、社会的に蓄積するための方法論が必要となる。それを試みるフィールド派の専門家がこれまでどうしていなかったのか。いや、これは医学や医療の制度的・組織的な枠組の問題だったと考えるべきであろう。それは質的フィールドワークを旨とする看護学（または社会学や民俗学）が医学と工学の仲立ちとなって成立する臨床的・学際的な研究テーマなのではないだろうか。